ダダ甘妹の
応援エッチ
癒やしてあげるわ
お兄ちゃん！
立ち読み版
小説 愛枝直
挿絵 竹馬２号

一章　泣いてもいいのよお兄ちゃん　006
二章　わたしに任せてお兄ちゃん　046
三章　一つになろうよお兄ちゃん　099
四章　癒やしてあげるわお兄ちゃん　166
五章　お兄ちゃんとずっといっしょ　216

登場人物紹介

Characters

上手よ、お兄ちゃん♡
えらいぞー♡

一乃崎光里（いちのさきひかり）

忍の義理の妹。世話焼きさんな性格で、友人にお母さん呼ばわりされている。日に日に疲れていっている兄を心配し、その身体を使って癒やそうとする。

一乃崎忍（いちのさきしのぶ）

貧乏くじを引きやすい男子生徒。生徒会長から書記に任命され、こき使われている。

一章　泣いてもいいのよお兄ちゃん

妹に抱きしめられている。

明かりの消えた暗い部屋。隅に置かれたベッドの脇。床に膝をついた一乃崎忍（いちのさきしのぶ）は妹である光里（ひかり）の温もりに包まれていた。

涙の跡が残った頬を柔らかな乳房が支え、後ろ頭に添えられた小さな手が優しく髪を梳（くしけず）る。触れ合った肌から体温が伝わり、鼻腔には心安らぐ甘い香りが流れ込む。

「いいんだよ。泣いたっていいじゃない、お兄ちゃん」

耳元に唇を寄せて妹が囁いた。いつもはキラキラと生気に溢れた声が、今はしっとりと落ち着いた響きを湛えていた。

きっとそのせいだろう。目の前に居る彼女がまるで知らない誰かのように思えて、それならちょっとぐらい情けないところを見せてもかまわないかと理性が揺らいで、忍は細い背中にきゅっと縋り返した。

「わたしが側にいてあげるから、ねっ？」

くす、とかすかな笑みを零し、光里ちゃんが頬ずりをする。髪が擦れてサリと音を鳴らすたび、ささくれ立って過敏になった神経が落ち着きを取り戻していく。

一体どうして自分と彼女がこんなことになってしまっているのか、まるで訳がわからな

い。
ただ一つだけはっきりとしているのは――全身と五感を包む彼女の温もりが、弱りきった忍には抗いがたいほど心地よくて――いつものように『お兄ちゃん』らしく振る舞うことなどできそうにないことだけだった。

☆

その日の朝。
一乃崎光里は、いつもの友人達といつもの通学路を歩いていた。
同年代の少女と比較してもちんまりとした身体つき。肩までのショートカット。ほんの僅かにつり上がった大きな瞳で曇り空を睨み付けている。まるで苦手な数学の宿題でも浮かんで見えているかのような眼差しだった。
「光里、どうしたのです？　なんだか眉毛がむーってなってるのです」
右隣を歩く優しげな垂れ目の少女が、小首を傾げる。
「はへ？　そんなことないわよ、明莉」
慌てて答える光里の口元に、ぴょこんと可愛らしく八重歯が覗いた。
そうなのです？　と、邪気のない調子でまた尋ねる友人に、光里はなんと答えようかと少し迷った。見返す内に彼女の髪が跳ねているのを光里はめざとく見つけた。
「そういう明莉こそ髪の毛がぴょこんってなってるわよ」
明莉の背中に回り、鞄の中から取り出したヘアピンで寝癖に応急処置を施す。

「もっと身だしなみに気を遣わなきゃダメよ。ちゃんとしてれば明莉は可愛いんだから」
「はわわ、ありがとなのです」
光里はひらひらと手のひらを振って応じた。
そのやりとりを左隣から静かな眼差しで眺めていた少女が小さくあくびをかみ殺した。
「奏（かなで）、目の下にクマができてるわ。また夜更かししたの？」
明莉の世話を焼いて少し調子が出てきた光里は、腰に手を当て小言を垂れる。
「スマイルチューブで『三時間耐久、子猫が低反発枕をもみもみするだけ』という動画を見つけたんだ。本当に三時間ループするだけか確かめていたら、夜中の三時になっていた」
「もー。そんなしょうもないことに貴重な乙女の睡眠時間を浪費しないの。ほら、これあげるからシャキっとしなさい」
白い頬を指先でつっつき、手のひらサイズの魔法瓶を鞄から取り出して奏に渡す。
「わぁ、可愛い水筒なのですっ」
「ふふん、二百ミリリットル入りよ。ちょうどいいのを探すのに結構苦労したんだから」
「コーヒーか。ありがたい」
一口飲んで確かめ、淡々とした口ぶりで礼を告げた友人に、光里は満足げに頷いた。
三人は同じ学校の同じクラスに通う友人同士だ。背の順で並ぶときに前の方に固まる縁でなんとなく話すようになり、今では何をするのも一緒になった。
ほんわかおっとりした性格の明莉。クールなのにたまに真顔で変なことを言う奏。光里

は二人のことが大好きだった。
「今日は光里の『お母さんチェック』が出るまでずいぶん時間が掛かったのですー」
納得のいかないことが皆無というわけでもないけれど。
「何よぅお母さんチェックって。おばさん扱いしないで欲しいわ」
二人は何かにつけて光里のことを『お母さん』呼ばわりしてくるのだ。頼りになるという意味なのは十分わかっているのだが、年頃の女の子としてはやっぱり微妙な気持ちだ。
「だが、確かにこのコーヒーからは母の愛を感じる。明日もこれが飲めると思えば安心して夜更かしができそうだ」
「そんなんじゃダメよ！　規則正しい生活をしないと、困った大人になっちゃうわよ？」
「そのときは光里に養ってもらうから問題ない」
「ダメ人間製造機なのです」
「……なんだかサラッとすごいこと言われた気がしたんだけど」
それに――と。目下の気がかりを思い出して、光里は溜め息をついた。
「わたしなんて、そんな大したことができるわけじゃないわ」
その様子に、二人がきょとんと首を傾げた。
「やっぱり、今日の光里はちょっと変なのです」
「……兄君のことかい？」
ほんの少し迷ってから、光里は小さく頷いた。

光里には、二つ年の離れた兄が居る。血は繋がっていない。光里が小学生だった頃に両親が再婚して家族になった。

暮らし始めた最初の頃は、年上の男の子というだけで気後れしていたが、その少年――忍はとても優しくて、光里はすぐに彼のことを『お兄ちゃん』と呼んで慕うようになった。

「学校でね、ものすごく忙しいみたいなの。毎日帰ってくるのが八時過ぎで、最近は顔色も悪くって。せめて愚痴だけでも聞いてあげられたらいいんだけど、お兄ちゃん、すごーく我慢強い人だから……」

「確か、生徒会の役員と言っていたかい？」

「そーなのよ奏。きっと鬼みたいな先輩達に無理な仕事を押し付けられてるんだわっ」

名は体を表すの言葉通り、忍は忍耐の人だった。彼が不平不満を零す姿など滅多に見ないし、ましてや人を悪く言うのを聞いたことなど一度もない。

そして、だからこそ日に日にやつれていく『お兄ちゃん』のことが光里は心配だった。

再びむーっと難しい顔で空を見上げる。

気もそぞろな光里の背後に、こっそりと奏が回り込んだ。

「ならば私にプランがある」

そして何やら妙なことを宣(のたま)って――唐突に光里の胸を揉みしだいた。

「あうっ！　ちょ、ちょっと奏!?」

「この素晴らしい揉み心地の乳房を用いて兄君を癒やしてあげればいい」

友達になったきっかけが示す通り、三人の背丈はそろって低い。だが、光里には友人二人には見られない発育上の特徴がある。
光里の胸は、奏の小さな手から零れ落ちそうなほど大きかった。セーラーカラーをこんもりと押し上げ、谷間に走ったスクールバックの肩紐でボリューム感を強調されたたわわな乳果は、揉み込まれるたび量感たっぷりにむにゅむにゅと形を変え、その柔らかさを見る者全てにありありと伝える。
「ダメよ……っぁン、やめなさいったらっ」
顔を真っ赤にして制止するが、光里の声音にはどこか甘い響きが紛れ込んでいた。刺激的な光景に、同じ学校の制服を着た少年少女がちらちらと視線を走らせている。
光里は、身を捩って無理矢理に奏を振りほどき、僅かに息を荒らげながら胸元を庇った。
「まったく、そんなことできるわけないじゃないっ」
「えー。わたしも名案だと思うのですー」
「何よもう！　明莉までっ」
じっとり睨み付けると、二人はそれぞれ朗らかに、かすかに、笑う。
「光里もそのお兄ちゃんさんも真面目すぎなのです。うちのお兄ちゃんならエネルギー補給！　とか叫びながら下着を入れたタンスの引き出しに顔を突っ込んでると思うのです」
「直接スカートの中に潜り込んでくる線も否定しがたい」
「あ、明莉達も大変ね……」

二人もそれぞれ兄がいるという話だった。頬を引き攣らせながら光里はお茶を濁した。
「とにかく、光里まで暗い顔してたら、逆にお兄さんに気を遣わせちゃうのですよ」
「そうなのよねぇ。あー、もうっ。今すぐお兄ちゃんの学校に飛び級してお手伝いができたらいいのに！」
細く柔らかい髪を両手で掻き毟って、再び曇り空を見上げる。
「お兄ちゃん、大丈夫かな。今日は早く帰ってこれるといいんだけど」

☆

『生徒会より業務連絡を行う。一乃崎忍。至急生徒会室まで来い。以上だ』
校内放送のスピーカーから無慈悲な声が響いてきたのは昼休みに食い込んだ数学の授業が終わってすぐ、一乃崎忍がコンビニで買ったサンドイッチに齧り付こうとしているまさにそのときだった。零れかけた溜め息を慌てて押し殺し、忍は席から立ち上がった。
「忍ちゃん大変だねぇ、生徒会」
「でも、会長を毎日近くで見られるのは少し羨ましいかも」
パックジュースのストローから口を離し、ねぎらいの言葉を掛けるクラスメート。それを糸口に別の女子がお気楽に言う。
「あ、あはは……」
そりゃ女の子ならそうなんだろうけどさ――一瞬そんな皮肉が頭によぎるが、忍はそれをぐっと飲み込み曖昧に笑った。

「ほんと？　よかったわっ。ねぇ、ほかには？　ほかには？」
「……触ってると、ほっとする……かも」
勢いに押されるままにまた答える。すると光里ちゃんは、まるで大好きなかき氷の一口目をほおばったときみたいに幸せそうに身悶えをして、
「〜〜〜〜〜っ！♡　もう、お兄ちゃんたらっ。お兄ちゃんったら！」
「むぐっ⁉」
今度は生の乳肌に、忍の顔面を埋めてしまった。
「ほらほら、触るだけじゃなくって、もっとすごいことをしてもいいのよ？」
「んぅ……っ、ぷぁ！　も、もっと……って……っ」
陰茎に絡めた指の動きにいっそう熱を込めながら、光里ちゃんは肩を揺すってたゆん、たぷんと柔乳を口元に押し付けてくる。吸い付くような絹肌が頬を撫で回り、甘い体臭が至近距離から鼻腔へ流れ込んでくる。
ここまであからさまなアピールを受けて『もっとすごいこと』の意味がわからないほど忍は鈍感でも純情でもない。こりこりと痼（しこ）った感触が、まるで『食べて食べて』といざなうように顎や鼻や唇の上を転がっている。
まるで禁断のリンゴならぬ禁断のサクランボだ。コレを口に含んでしまったら、きっと自分は『お兄ちゃん』として引き返せないところへ落ちてしまう。
（だけど、もう僕……！）

わかっていながら忍はその誘惑に耐えきることができなかった。疲れきった頭に許容限界を遥かに超える淫らな興奮を流し込まれた少年は、本能の命じるまま――。

くちゅ、と。豊乳の突端をついばんだ。

「ん……ちゅ、ちゅく……ひかりちゃん。んく……」

小指ほどの大きさまで膨らんだ肉粒を、唇で挟み、ちゅくと吸い上げ、舌を当てて舐め回す。妹の乳果にむしゃぶりつく。

「んっ……そうそう。上手よ、お兄ちゃん♡　えらいぞー♡」

情けないほどの必死さで自分の胸に甘える兄を、光里ちゃんはどこまでも優しく受け入れる。慈愛に満ちた微笑みを浮かべ、愛しげに髪を梳る。

今日一日の疲れや頭にこびりついた嫌な記憶が、薄れて小さくなっていくのを忍は確かに感じた。擦りむいてささくれたような心の痛みが柔らかく温かいものに包まれて癒やされていくようだった。

（あ……これ、ダメになる……）

僅かに残った冷静な自分が上げる声は、溺れるほどの幸福感に飲み込まれていく。忍はもはや夢中になって、両手で乳肉をむにむにとまさぐり、出もしない乳汁を啜ろうとするように母性の証を吸い立てる。

「うふふ。お兄ちゃんたら赤ちゃんみたい。可愛いわ♡」

かすかに吐息を熱くしながら、妹が甘い揶揄（やゆ）を投げかけた。かぁっと頭が茹だるような

恥ずかしさがなぜか今は心地よい。僅かに身を捩ってむずかる忍を見て愛おしげにくすくすと笑い、光里ちゃんは勃起肉へと愛撫を重ねる。緊張をほぐされて快楽への抵抗をなくした忍のペニスは、ビクビクと打ち震えながら急速に限界へと上り詰めていく。

「元気になぁれ♡　元気になぁれ♡」

歌うように繰り返しながら、光里ちゃんは肉竿をにゅくにゅくと撫でさすった。甘い愉悦が局部に閃き、忍の腰がみっともなくもぞつく。

こんなことさせちゃダメなのに。お兄ちゃんとして妹を止めなきゃイケナイはずなのに。だけど小さく柔らかな手に刺激される性器がビリビリと痺れて、たまらないほど気持ちいい。言い訳のように考えながらも、間近に迫った射精を我慢できないのは自分自身が一番よく知っている。その浅ましさがみっともなくて恥ずかしいのに、その恥ずかしさに訳がわからないぐらいに興奮してしまう。

じゅんと頭の奥が痺れてもう何も考えることができず、忍は縋るように妹の乳首をしゃぶった。光里ちゃんは、まるでそれを何かの合図と受け取ったみたいに、一際強くぐちぐちと激しく雄器をしごき立て――。

「んぅっ……くぅ、っふぅぅぅぅぅっ！」

兄を射精に追い立てた。

ガクガクと下腹を前後させ、肉筒をビクビクと脈打たせ、忍は大量の精液を吐き出した。溜めに溜め込んでいた雄の欲望は妹の小さな手のひらには収まりきらず、砲身の暴れ回

るがままに宙へ床へ彼女に向けてと好き勝手にまき散らされる。
尿管を駆け上った白濁塊が鈴口から噴き上がるたび、きりきりと痛むほどに強く睾丸が縮こまり、視界が滲んで歪むほどの快美が襲い来る。忍はガクビクと打ち震えながら、跡が残るほどに強くニップルを吸い上げる。
「わわっ、男の人のって、こんなにいっぱいでるんだ。すごーい♡」
外気に触れたスペルマからは生臭い匂いが放たれるが、その源を肌に服に浴びながら、光里は無邪気に歓声を上げた。その朗らかな声に耳をくすぐられた忍は、恥ずかしいような、嬉しいような、正体不明の強烈な興奮に襲われてまたびゅぶびゅぷと精液を垂れ流す。
精通を迎えて以来こんな気持ちいい射精は初めてだった。信じられないほどの長い時間その快美を味わい尽くして——ようやく吐精が収まった。
妹の乳首を口に含んだままぼんやりと瞳を宙に彷徨わせ、ふぅふぅとみっともない鼻息を零していた忍はふいに冷静さを取り戻した。
慌てて唇を乳房から放す。ちゅぽんと甘い水音がして目の前で豊果が跳ねる。
「ひゃんっ♡」
「ご、ごめんっ、光里ちゃん……僕、汚して、その……」
泣きそうな目で見上げると、妹はきょとんと小首を傾げて、またにっこりと微笑んだ。
「謝らないでいいのよ。すっごく気持ちよかったんだもんね。お兄ちゃんは何にも悪くないわ♡」

いい子いい子と口にしながら優しく忍の頭を撫でる。
それでもまだ言わなきゃいけないことが――と思いながらも、それが見つかる気配はいっこうにない。何も言葉が出てこない。
「いっけない！　早くご飯の支度をしないと」
まごつく内に妹は慌てた声を上げて身を起こした。床に落としたブラを回収し、胸元のボタンを閉じて身体を離すと、開いたままのドアに向かう。
「待っててね、お兄ちゃん。すぐに美味しいご飯を作っちゃうわっ」
振り返ってまた微笑み、とてとてと足音を立てながら階下へ降りてしまった。
残された忍はただただ呆然としながら彼女の去ったドアを眺めている。
「あれ……なんでこんなことになったんだっけ……？」
半笑いで呟いてみても答えてくれる人なんてどこにもいなかった。
けだるい余韻が全身を包んでいる。ぼんやりと霧がかかった頭はうまく働かない。
体力の全てを使い果たした忍はそのままうとうとと船をこぎ始め、床に転がったまま眠ってしまった。
忍は疲れきったあまり、ほんのさっきまで胸を真っ黒に染め上げていたどす黒い負の感情が綺麗さっぱり消えていることに気づかなかった。
最近はお定まりになっていた悪夢を、その日は見ることがなかった。

ぐっと力強く下腹をせり出す。くちゅん、と。再び光里の最奥がノックされた。
「っくぅんッ♡」
子犬のような嬌声を上げて、光里は頤をはね上げた。全身がビクンと震えて雌襞がにちゅりと雄器に縋る。
痛みは完全に消え去っていた。萎えていたとはいえずっと彼の肉棒を咥え込んでいた蜜口は、すっかり柔らかく寛げられていたのだ。その上たっぷりと出された赤ちゃんの素が子宮から蕩け零れて潤滑の役割を果たし、抽送を助けてくれている。感じられるものはただ甘い幸福感と腰下がぞわぞわと痺れるような愉悦だけだった。
「お兄ちゃん……いっぱい突いて♡」
光里はうっとりと目尻を下げて促す。
「う……うんっ！」
可愛らしくこっくりと頷いた彼は、逞しく腰を揺すり始めた。
お兄ちゃんはもう止まらなかった。ミシミシとベッドのスプリングを鳴らして、何度も何度も膣奥へペニスを突き込む。ついさっき出された精液が膣内で掻き混ぜられてくちゅ、ぷちゅと秘めやかな水音が響く。
「ふぁっ♡　あんっ♡　お兄ちゃん上手よ♡　もっといっぱい♡　突いて♡　突いて♡」
光里も突き込みに合わせて腰をくねらせながら、自分自身で恥ずかしくなるほどいやらしい声で誘いかけた。

一度射精したことでお兄ちゃんも余裕ができているらしく、その腰使いは大胆なほど大きい。力強く張り出した肉傘が膣襞をこそいで子宮口をコンコンと叩くたびに、ジンジンと淫悦の波が幾重にも重なって下腹から全身へと広がっていく。その逞しい感触に、光里の心はうっとりと心地よく蕩ける。溢れるほどの愛おしさが全身を巡ってとてもじっとしていることなどできず、腰が独りでにくねり出す。

「大好き♡　好き好き♡　お兄ちゃん大好きぃ♡　ねぇお兄ちゃん、もっといっぱい気持ちよくなろ？♡　たくさんたくさん大好きし合お？♡」

抑えきれない愛の愉悦にビクビクと小柄な肢体をひくつかせながら、光里は夢見心地な笑顔を浮かべた。頭の中が桃色に染まって身体中がうずうずとする。今だって腰から下がとろとろになるほど気持ちいいのに、もっともっとお兄ちゃんと愛し合いたくてたまらない。欲張りな気持ちが抑えきれない。

こくりと頷いた彼の手が汗みずくのお尻を掴んだ。むっちりと肌がたわむぐらい指に力を込めて情熱的に揉みしだきながら、いっそうピストンの勢いを強くする。

「ふぁ♡　っぁあン♡　お兄ちゃん♡　お兄ちゃんっ♡」

びりびりと電気が流れるような強烈な快美が突き捏ねられる蜜肉から生まれて、光里はうわごとのように何度も兄を呼んだ。

「あぅン♡　っぁはぁ♡　ぁン♡　好きぃ♡　お兄ちゃん大好きぃ♡」

「光里ちゃん……光里ちゃん……！　僕、また……！」

お兄ちゃんも切なげに呼び返しながら、出したばかりの精液をおま○この中でぐちゃぐちゃに掻き混ぜるように激しくおちんちんを出し入れする。

呼吸のペースが短く速く、腰の動きもまるで奥へ奥へと先っぽを押し込んでいくような細かいものへと変わっていく。

出したいんだ――そう直感した瞬間、光里の膣肉もきゅうと窄まり、甘えるように彼の肉竿に巻き付いた。

「いいよ、お兄ちゃん♡　出して♡　出してぇ♡」

お兄ちゃんが力強く腰を突き出す。赤ちゃんの部屋の入り口が真下からぐにゅりと押し上げられて、ずぅんと重たく腰下が痺れて頭の中が真っ白になる。そして――。

「光里ちゃん……っ。うぅーーーーっ」

びゅく、びゅくっ、どぷっ！　と。重たい唸り声と共にお兄ちゃんはわたしの中でまた射精した。

お腹の中に温かい赤ちゃんの素が満ちていく。胸の中にいっぱいの幸せが満ちていく。今まで何度もお兄ちゃんにご奉仕をして、そのたびに感じてきた幸せな気持ちを何倍にも膨らませたような幸福感が、子宮いっぱいに広がっていた。こんな体験は生まれて初めてなのに、なぜかずっと叶えたいと願っていた夢が叶ったような歓びを感じた。

本能が、満たされていく。奏の言っていたことはきっと本当だったのだ。妹に赤ちゃんを産ませたいと思うのがお兄ちゃんの本能だから、お兄ちゃんの精液を赤ちゃんの部屋で

受け止めたいと思うこともきっと妹の本能なのだ。
「ふぁあああっ♡」
光里もまた快楽の極みに飛んで、甘えるような嬌声を上げた。ビクビクと身悶えながら胸板に縋り付き、おかわりをねだるようにきゅんきゅんと膣襞を締め付けて雄肉を絞り立てる。
気持ちよさを訴えるようにビクン、ビクンと暴れる彼のおちんちんが愛おしくて愛おしくてたまらなかった。トクトクと注ぎ込まれる愛の証をいつまでもこうして子宮に受け止めていたいと光里は思った。
やがて――ビクンと強い脈動を最後に彼の吐精が終わりを迎え、そろって絶頂の強張りがほどける。
「あは――♡　初めてえっちで二回もぴゅーってできたね♡　頑張り屋さんのお兄ちゃん、えらいぞー♡」
お兄ちゃんにしなだれかかりながら、光里はよしよしと彼の頭を撫でた。
全身を脱力させた二人は、じゃれ合うように汗濡れた肌を互いに擦り付ける。
「光里ちゃん……あのね」
小さな動きでくいくいと腰をくねらせながら、お兄ちゃんがふいに呼びかけた。
「んっ♡　あふ……♡　なぁに、お兄ちゃん♡」
お腹側の膣壁をぐちぐちと擦られる優しい刺激に喘ぎ声を零しながら尋ね返す。

「ほんとはね、学校ですごい、嫌なことがあったんだ」
「うん……」
「帰ってきたときはね、辛くて、辛くて、もう学校に行きたくないって思ってたんだ」
「うん……うん♡」
「でもね、光里ちゃんがいてくれたから。何度も大好きって言ってくれたから。またがんばれるよ。光里ちゃんがいてくれるなら、大丈夫かもって思えるよ」
「うん……♡」
「光里ちゃん、ありがとう。大好きだよ。光里ちゃん、大好き」
泣きそうな顔で微笑みながら、じっと光里の目を見つめながら、お兄ちゃんが言う。
切ないぐらいの嬉しさが胸に満ちて、瞳が潤んで視界が滲んだ。何もかもが今の言葉で報われたと思えた。
「わたしも好き。お兄ちゃんが大好きよ♡」
声を涙に震わせながら、じっとお兄ちゃんの目を見つめながら、光里も愛の言葉を返す。
「これからも、僕のことを支えてくれる？」
「……♡　当然じゃない！　もっともーっと、光里に甘えていいのよ、お兄ちゃんっ♡」
二人はどちらからともなく唇を重ね――幸せいっぱいに微笑み交わした。

胸先から生じた切ない疼きは、瞬く間にお腹を伝ってじんわりと下腹を痺れさせる。もじもじと揺れる太ももにおちんちんを擦られて、お兄ちゃんの甘声も少しだけ大きくなり、乳首を虐める薬指の動きが速くなる。互いが互いに与える快美がまたお互いの愛戯を大胆にして、愉悦の雫は驚くほどの早さで子宮に満ちていった。揉み捏ねられる乳肌の奥でどくどくと強く鼓動が鳴って、肌という肌が赤らむほどに上気した。勢い呼吸も速くなり、ふー、ふー、と動物さんのような生々しい吐息が鼻から零れ、見つめ合う瞳がどろりと妖しく濁る。いつの間にか二人の舌はべったりと溶け合うように張り付いて、ねちり、ぐちゅりと、いやらしいほどに緩慢に蠢いていた。

——キスだけでうなじの後れ毛が逆立つほど気持ちいい。お腹の奥のうずうずが蜜に変わって溢れて零れ、大切な部分にじゅわりと染み出していく。鼻の呼吸だけじゃとてもとても酸素が足りそうにない。発情しきった光里はたまらず顔を上げてキスを中断した。

「……っはぁ♡　お兄ちゃん、好きっ♡　大好きぃ♡」

「光里ちゃん、僕も……っ。僕も光里ちゃんのことが大好き……っ」

はぁはぁと荒い息を零しながら愛の言葉を交わし、頬に、鼻筋に、首に、耳に目蓋に額にと、音高く唇を鳴らして互いの顔中に口づけを降らせる。その甘い感触に興奮も極みに達した光里は、爛々と輝く瞳で彼のことを見つめながらぎゅっとその背中に両腕を回した。

「ひかりちゃ……わぷっ」

ぐっと腰を引いてお兄ちゃんの身体をバスタブのへりから降ろし、床板へと直に座らせ

る。位置を下げた二人の顔にシャワーのお湯が降りかかる。もどかしげな手つきで栓を閉じ、再び彼の膝に乗りかかる。

「ねぇお兄ちゃん、もぉ我慢できない……っ♡　おちんちん光里にちょうだい……♡」

そして、聞くが早いか光里はガチガチに勃起したペニスの根元をその小さな手で支え、なんのためらいもなく自らの姫壺へぐっぷりとねじ入れた。

「っふ……あはぁああはわぁああ……っ♡」

「う……うぅーッ！」

頤を反らして夢見心地に宙を見上げながら、だらしなく口元を緩めてよがり喘いだ光里に対して、お兄ちゃんはぎゅっと総身を強張らせてくぐもった呻きを吐き出す。その可愛らしさに雌襞がきゅうんと窄まり、ビクビクと脈打つ雄肉をにぢりと強く抱きしめた。

（あ……なんでぇ……ッ♡　お兄ちゃんのおちんちんいつもより感じちゃうぅッ♡）

久しぶりの交接で身体が待ちわびていたからなのか、それとも改めて想いを確かめ合って気持ちが昂っているからなのか、ただ挿入を果たしただけで目の前がぐんにゃり歪むほどの快美が腰下を満たした。キスと胸揉みの前戯だけでどろどろに濡れそぼった雌口が、意地汚いぐらいににぢゅにぢゅと彼のペニスをしゃぶり立てる。自らの媚肉が蠢いて生まれる淫悦が、すでに限界近くまで疼き溜め込んでいた女体へのだめ押しになって、光里の意識は瞬く間に真っ白に染まる。

「ふわぁあッ♡　イク……ッ♡　おちんちん挿入れただけで光里のおま〇こイッちゃうぅ

うぅッ♡」
淫らな告白をわめきちらしながら、ガクビクと卑猥な痙攣を見せ、光里は悦びの際に飛んだ。発育よくむっちりと張り詰めたお尻を激しく前後に揺すり立て、ギクン、ギクンと、何度も腹腔を引き付けさせる。水濡れて妖しく輝く若肌が弾けるように震え躍り、たわわな乳果が恥ずかしげもなく跳ね回る。
「んぐぅ……ッ！　締まるぅッ！」
戦慄く肢体に同期して、光里の雌器も彼のペニスを握り潰すような乱暴さでぎちぎちと窄まる。悲鳴じみた呻きを漏らしながらもお兄ちゃんはその締め付けに張り合うようにぶっくりとおちんちんをまた一段と怒張させる。その力強い感触に悦びはいや増し、圧迫された尿口から無色透明の雌汁がぶちゅりと勢いよく噴き出した。
（イ……っちゃった……♡　おちんちん、挿入れただけで……♡）
「はわ……あはぁ……♡　お兄ちゃん好きっ♡　好きぃ♡」
意外なほど逞しい腹筋にびちゃびちゃと潮を吹きかけながら、光里は恍惚とした声音でまた愛を囁き、彼の胸板にもたれかかった。アクメの余韻を長引かせるように柔乳をすりすりと胸板に擦り付け、絡めた腕で背中を狂おしく撫で回す。
「ひ、光里ちゃんちょっと待って……」
「だぁめ♡　光里に甘えんぼさんしたいって言ったのはお兄ちゃんなんだから、可愛いってするのやめてあーげない♡」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!